

一般社団法人全日本かるた協会

読手講習ビデオ (PDF版)

2020年10月

【用意するもの】

■ 令和2年4月発刊

『小倉百人一首
競技かるた読手テキスト』



※手元に無い場合
全日本かるた協会ホームページ
「競技関係規程」にテキスト掲載

◆ お知らせ		◆ 目次	
ようこそ。 こちらは、百人一首・競技かるたの (一社)全日本かるた協会のページです。			
「2020 インターナショナル 小倉百人一首かるたフェスティバル」 特設ページ			
新型コロナウイルス感染下での練習会再開 ガイドライン	2020.6.6	<input type="checkbox"/> 協会について	
事務所お休みのお知らせ	2020.5.9	<input type="checkbox"/> 会員ページ	
2020インターナショナルフェスティバル の開催延期について	2020.4.25	<input type="checkbox"/> How To Play かるた	
「百人一首関係コンテンツ」のホームペ	2020.4.25	<input type="checkbox"/> かるた Q & A	
		<input type="checkbox"/> 競技関係規程	

講習は『小倉百人一首競技かるた読手テキスト』を用いて行うので手元に用意してください。

テキストが無い方は「全日本かるた協会」ホームページの「競技関係規程」にテキストの抜粋を掲載しています。それをご覧ください。

【講習内容】

- 1 「読手心得」と「読唱上の決まり」
- 2 読みのポイントと効果的な練習法
- 3 新テキスト改訂のポイント

講習内容は以下の3点です。

「**競技を前提**としての読み」

「**競技者が安心して競技に臨めるよう
努める**」【テキストP1「はじめに」】

「読み・取りの両方を学ぶ」

まず、「読手心得」について説明します。

「読手」は「**競技を前提としての読み**」を心がけてください。テキスト1ページの「はじめに」の最後の行に、「読手を志す者は、車の両輪のように、読み・取りの勉強をし、競技者が安心して競技に臨めるように努めてほしい」とあります。もし、あなたが読手を本格的に学びたいなら、読みと取りを相互にリンクさせ、競技者の側に立った読手をめざしてください。

読手の基本【テキストP2】

■ **公正**な態度 → 不信感を与えない

■ **正確**かつ**標準的**な読み

→ 不安感・違和感を与えない

テキストの2ページには、「読手の基本」として、「公正な態度」及び「正確かつ標準的な読み」が挙げられています。競技者に不信感や不安感や違和感を与えない読みこそ、理想の読みだと考えます。

練習会で読んだときなどに、あとで自分の読みについて競技者に尋ねてみてください。

「特に何も気づかんかったけど…」と言われたらOKだと考えてよいでしょう。

競技会心得【テキストP2】

- (1) 競技前に読札が100枚あるか確認を！
- (2) 読札をよく切る→裏返し→読んだら表にする
- (3) 競技開始時に競技者に合わせて一礼する
- (4) 競技者の準備状況を確認してから下の句を読む
- (5) 読みに専念→視線は正面(上の句は札を見る)
- (6) 審判長による最後の対戦の終了宣告
→下の句を読み切って一礼

2ページの2にある「競技会心得」には、公式大会などで読手が行うべき内容が6点書いてあります。

(1)まず、主催者から読札を渡されたらすぐに100枚あるか確認します。もし、100枚ない場合、札の重複や欠落が疑われるので、主催者に確認が必要です。

(2)読札のシャッフルは読手の仕事です。トランプなどでよく使われる「ヒンドゥーシャッフル」は、下の束と上の束を入れ替えるだけでうまくシャッフルされません。他のシャッフル法と組み合わせて使うならよいでしょう。理想は、「ディールシャッフル」と呼ばれる、5つ程度の山を作ってランダムに1枚ずつ配置してから統合する方法、または、全部かき混ぜる「ウォッシュシャッフル」などを用いてください。なお、「ウォッシュシャッフル」の場合は、札の天地をそろえる必要があります。いずれも、公正を保つため、シャッフルは札を見られないよう裏返しのまま行い、そのまま読唱箱に入れます。読唱箱を使わないときは裏返して積み重ね、1枚ずつ手に取って読むようにします。読み終わった札は必ず表にして積み重ねます。

(3)暗記時間中は、中座してもかまいませんが、暗記時間終了2分前がコールされるまでに読手席に戻ります。競技開始時に競技者に合わせて一礼します。飛沫感染予防対策として、読手は、フェイスシールド又はマウスシールドを着用し、競技者から2メートル以上離れて読みます。なお、マウスシールドに比べ、フェイスシールドの方が声がこもって聞こえにくいので、フェイスシールドを使用する際は注意が必要です。

(4)競技中は、会場全体に目を配り、競技者の準備状況を確認するとともに、次の読札を用意した上で、下の句を読み始めます。

(5)競技中は読みに専念します。誤読を避けるため、読み始める前に下の句をしっかり確認した上で視線を正面に向けて読みます。上の句は札から目を離さずに読みます。

(6)審判長が最後の対戦の終了を合図したら、下の句を読み切って一礼します。終わったら読札が100枚あるか数え、主催者に返却します。以上が「競技会心得」です。

■ 5・3・1・6方式【テキストP3】

5…前の札の下の句（5秒程度）

3…余韻（3.0秒 → 2.9～3.2秒はOK）

1…間合い（1.0秒 → 0.9～1.2秒はOK）

6…出札の上の句（6秒程度）

【初句】1字 約0.2秒 ← およその目安

テキストの3ページをご覧ください。「読唱上の決まり」について説明します。

競技かるたの読み方は文法を重視しながらも、競技者の取りやすいタイミングをはかるため、独特な読み方をします。

まず、決まりの1についてですが、読唱の基本パターンを「5・3・1・6方式」と呼びます。競技かるたでは、前の札の下の句を読んで、余韻・間合いがあつて、出札の上の句を読みます。

下の句は「5秒程度」で読みます。「5秒程度」とは、4秒台後半から5秒台前半を意味します。

余韻の3.0秒は、2.9から3.2秒であればOKです。ただし、一首ごとに余韻の長さがぶれないよう、一定の長さになるよう努力しましょう。

間合いの1.0秒は、0.9から1.2秒であればOKですが、やはり一定を保ってください。

上の句の「6秒程度」は、5秒台後半から6秒台前半で読んでください。以上の読みのタイミングを「5・3・1・6方式」と呼びます。

なお、テキストの3ページに、初句については一字をおよそ0.2秒の速さで読むとありますが、実際には時を刻むように読んでいるわけではなく、音から音への変化は切れ目なく連続しているので、およその目安として書いてあります。競技者にとって違和感のない速度で読めばよいと考えてください。

■ 5・3・1・6方式【テキストP3】

5… わが^{0.6秒}ころもでは^{1秒}つゆにぬれ^{0.6秒}つ

3… つ^{0.2秒} + ^{2.8秒} = ^{3.0秒}

これらは目安の長さ

1… 【間合い】

6… はるすぎて^{1秒}なつきにけらし^{0.6秒}
 しろたえ^{0.6秒}の^{0.6秒}

ではここで実際に読んでみましょう。

ポイントとしては、短い伸ばしを0.5~0.6秒程度で読み、長い伸ばしを1秒程度で読むとバランスがよくなりますが、これもあくまで目安であって人によって異なります。

伸ばしが長すぎたり短すぎたりすることによって「5・3・1・6」のバランスが崩れ、競技者がタイミングを合わせにくくならないように注意すればよいでしょう。

なお、余韻は「つ」を含めて3.0秒です。

★声に出して読んでみよう！

5 … わが—ころもでは—つゆにぬれ—つ

3 … つ— — — — —

1 … 【間合い】

← 特に重要！
一定にするように！

6 … はるすぎて—なつきにけらし—
しろたえ—の—

もう一度声に出して読んでみましょう。

「5・3・1・6」のうち、「5」と「6」も重要ですが、特に「3」と「1」は競技者がタイミングを取るうえで非常に重要なので、一定にするよう努力が必要です。

■大山札は二句目までを一気に読む
(一句目と二句目の間に伸ばしを入れない)

あさぼらけうじのかわぎり-----たえだえ---に---

※二句目途中で伸ばしを入れてもOK

ポイント① … 読むスピードは「速からず遅からず」
「一定をキープする」

つぎに、読唱上の決まりの3、「大山札は二句目までを一気に読む」ですが、これは一句目と二句目の間に伸ばしを入れずに読むということです。

では、「あさぼらけう」を実際に読んでみましょう。

ポイントは2点ありますが、まず1点目。読むスピードは速からず遅からず、一定の速度をキープすること。決まり字までが長いので「あさぼらけうじのかわぎり」を読み急いでしまう人がいますが、気を付けてください。なお、二句目途中で伸ばしを入れてもOKです。

■大山札は二句目までを一気に読む

ポイント② … 二句目最初の**アクセント**は
「低」でも「高」でも可

【例】 きみがため**お**しからざりし——

(A) き ^{みがため} お しからざりし——

(B) き ^{みがためお} しからざりし——

ポイントの2点目ですが、二句目の最初のアクセントは「低」でも「高」でもかまわないということです。「きみがためおしからざりし」を例に説明します。

決まり字の「お」に着目します。

Aは「お」のアクセントが低くなります。

Bは「お」のアクセントが高いままです。

どちらでも自分が良いと思う方で読んでください。ただし、同じ読手が「きみがためおしからざりし」はAで「きみがためはるののにいでて」はB、というのは統一感に欠けるのでやめましょう。

4 上の句の終わりは最後の一字の前で少し伸ばして読む。ただし、語の切れ目や読みやすさ外的に次の(1)・(2)を設定する。

(1) 二字前を伸ばすもの【全三首】

- ・わが庵は……しかぞくすむ
- ・秋風……たえ間より
- ・難波江の……ひとよゆえ
- ・わびぬれば……難波なる
- ・恋すてふ……立ちにけり
- ・山里は……まさりける
- ・かくとだに……さしも草
- ・君がため春……若菜つむ
- ・由良のとを……かちをたえ
- ・世の中は……なきも漕ぐ
- ・天の原……春日なる
- ・嘆けとて……思はする
- ・高砂の……咲きにけり
- ・みかきもり……夜はもえ
- ・夜をこめて……はかるとも
- ・架りきな……しほりつ
- ・君がため備し……命さへ
- ・世の中よ……思ひ入る
- ・有明の……別れより
- ・おほけなく……手向山
- ・このたびは……つみ川
- ・みかの原……おのれのみ
- ・風をいたみ……童田川
- ・ちはやぶる……みなの川
- ・つくばねの……みなの川

5 下の句の終わりは、競技者のタイミングに合わせるため、文法に関係なく最後の二字の前だし「もがな」「思へ」「思ふ」「なくに」「ものを」は三字でまとめる【全十一首】

- ・あらさらむ……もがな
- ・忘れの……もがな
- ・みかきもり……思へ
- ・愛かりける……ものを
- ・なにしおはは……もがな
- ・わびぬれば……思ふ
- ・みちのくの……なくに
- ・漣をはやみ……思ふ
- ・長からむ……思へ
- ・誰をかも……なくに
- ・いまはただ……もがな

【競技かるたの読み方一覧】

『序歌』

難波津に咲くやこの花冬こそ咲り

淡路島にかよふ千鳥の鳴く声

あはれともしふべき人は思ほ

あらし吹く三室の山のみち

あざさむこの世のほかの思ひ

秋の田のかりほの庵の

天つ風雲のかよひ路吹きと

天の原ふりさけ見れば春日

三笠の山にいでし月

今を春へと咲くやこの花

幾夜ねざめぬ須磨の守

身のいたづらになりぬ

童田の川の錦なり

今一ひとたびのあふこと

わが衣手は露にぬれ

おとめ姿しはしと

三笠の山にいでし月

テキスト4ページの4と5は、伸ばしの位置に関する決まりです。

上の句は最後の一字の前を伸ばし、下の句は最後の二字の前を伸ばします。

ただし、例外があるので注意しましょう。

上の句の場合、最後の二字前を伸ばさなければならないものが3首。「わがいおは」「よのなかは」「よのなかよ」二通りの読み方が許されているものが22首。たとえば「あきかぜに」の場合は「たえ間～より～」でも「たえ間よ～り～」でも、どちらでもOKです。この22首については、今回のテキストの改訂に伴い、許容範囲を広げました。

下の句については、三字の前を伸ばさなければならないものが11首あるので注意してください。

★声に出して読んでみよう！

序歌 | なにわずに——さくやこのはな——ふゆごも——り——
 | いまを——はるべと——さくやこの——はな
 | いまを——はるべと——さくやこの——はな
 ちぎりおきし——させもがつゆを——いのちに——て——
 | あわれ——ことしの——あきもいぬ——めり
 ちぎりきな——かたみにそでを——しぼりつ——つ——
 | すえの——まつやま——なみこさじ——とわ
 ちはやぶる——かみよもきかず——たつたが——わ——
 | から——くれないに——みずくくる——とわ

実際に声に出して読んでみましょう。

競技かるたでは、最初に百人一首に含まれない歌を読むことになっていて、それを序歌と言います。一般社団法人全日本かるた協会では序歌として、「難波津に」の歌を指定しています。

序歌だけは下の句を2回読む決まりになっています。続けて「ち」で始まる3首を読んでみましょう。

四句目の途中には例外なく伸ばしが入ります。伸ばす箇所を間違えないよう繰り返し訓練が必要です。テキストの改訂によって、これまでと読み方が異なる部分があるので注意してください。

【読手制度】

<資格>	<役割>	<選考方法>
専任読手	三大大会の読手，読手の指導育成	専任読手選考会
A級公認読手	主催・公認大会の読手（三大大会除く）	A級公認読手選考会
B級公認読手	主催・公認大会のB級以下の会場の読手	読手講習会 & 専任読手の推薦

ここから、読みのポイントと効果的な練習法について説明しますが、その前に、一般社団法人全日本かるた協会の読手制度について確認します。

読手資格には、大きく専任読手、A級公認読手、B級公認読手があり、資格によって役割が異なります。

資格を得る場合は、まずB級公認読手をめざしてください。各支部が主催して開催される読手講習会に参加し、専任読手の推薦を得て、B級公認読手に委嘱されます。

読みのポイントと効果的な練習法

公認読手選考審査用紙

審査項目	観点別評価
①決まり字までの読み (発音・アクセント)	<input type="checkbox"/> 決まり字までの発音が明瞭である <input type="checkbox"/> 決まり字までの読み方が流麗である <input type="checkbox"/> 1～2音目のアクセントが低高でかつ一定である
②決まり字までの読み (速度・一定性)	<input type="checkbox"/> 読む速度が速すぎず遅すぎずかつ一定である <input type="checkbox"/> 友札相互の読み方が一定している
③余韻 (3.0秒)	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ3.0秒である <input type="checkbox"/> 自然なフェードアウトで選手が集中しやすい
④間合い (1.0秒)	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ1.0秒である <input type="checkbox"/> 吸気や音漏れなど雑音が生じていない
⑤読みの正確さ	<input type="checkbox"/> 誤読がない(歴史的仮名づかいなど) <input type="checkbox"/> のばしの位置がテキスト通りである <input type="checkbox"/> 読みとばしや重複がない(序歌+百首)
⑥声の力強さ	<input type="checkbox"/> 腹から出ている声に力がある
⑦全体的なバランス	<input type="checkbox"/> 読む速度が早口でなく安定している <input type="checkbox"/> 余韻の前の2字(または3字)の読みが間のびしていない <input type="checkbox"/> のばしの長さが長すぎたり短すぎたりしない
⑧音程	<input type="checkbox"/> 音程が高すぎず低すぎず聞き取りやすい <input type="checkbox"/> 音程が安定していて終始変化しない

①～④は特に重要!

これは公認読手選考審査用紙の審査項目と観点別評価です。これを見れば、読みのポイントがよくわかります。競技経験者であれば、①～④が特に重要だということはわかるはずです。

読みのポイントと効果的な練習法

公認読手選考審査用紙

①～④は特に重要！

① 決まり字までの読み (発音・アクセント)	<input type="checkbox"/> 決まり字までの発音が明瞭である <input type="checkbox"/> 決まり字までの読み方が流麗である <input type="checkbox"/> <u>1～2音目のアクセント</u> が低高でかつ一定である
② 決まり字までの読み (速度・一定性)	<input type="checkbox"/> 読む速度が速すぎず遅すぎずかつ一定である <input type="checkbox"/> 友札相互の読み方が一定している
③ 余韻 (3.0秒)	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ3.0秒である <input type="checkbox"/> 自然なフェードアウトで選手が集中しやすい
④ 間合い (1.0秒)	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ1.0秒である <input type="checkbox"/> 吸気や音漏れなど雑音が生じていない

①～④の部分を拡大しました。

①と②が「決まり字までの読み」で、「発音」や「アクセント」に関する部分と、「速度」「一定性」に関する部分に分かれています。

③と④が余韻と間合いです。いずれも競技者が読みに集中する部分です。

①決まり字までの読み (発音・アクセント)	<input type="checkbox"/> 決まり字までの発音が明瞭である <input type="checkbox"/> 決まり字までの読み方が流麗である <input type="checkbox"/> <u>1～2音目</u> のアクセントが低高でかつ一定である
②決まり字までの読み (速度・一定性)	<input type="checkbox"/> 読む速度が速すぎず遅すぎずかつ一定である <input type="checkbox"/> 友札相互の読み方が一定している

■初句のリピート → 「速度」「一定性」「発音」の確認

【例】 ちぎりきな
ちぎりおきし

★競技者の感覚にフィットする読みを！
★自分の読みを競技者の立場から客観視！

効果的な練習法として、①②の「決まり字までの読み」については「初句のリピート」をお勧めします。たとえば、「ちぎりきなかたみにそでをしぼりつつ」であれば、初句の「ちぎりきな」だけをリピートします。「ちぎりきな～」「ちぎりきな～」「ちぎりきな～」
 リピートすることで「速度」「一定性」「発音」などを確認します。その際に、競技者の感覚にフィットするような読みになりえているか？自分が競技者になったつもりで読みを客観視します。初句だけなので、録音してすぐに聞き直すことができます。スマホなどの録音機能を活用してはどうでしょうか。

①決まり字までの読み (発音・アクセント)	<input type="checkbox"/> 決まり字までの発音が明瞭である <input type="checkbox"/> 決まり字までの読み方が流麗である <input type="checkbox"/> <u>1～2音目</u> のアクセントが低高でかつ一定である
②決まり字までの読み (速度・一定性)	<input type="checkbox"/> 読む速度が速すぎず遅すぎずかつ一定である <input type="checkbox"/> 友札相互の読み方が一定している

■初句のリピート → 「速度」「一定性」「発音」の確認

【例】 | **ちぎりきな**
 | **ちぎりおきし**

なにし**お**はば はなの**いろ**は
 たごの**う**らに かぜを**い**たみ
 たきの**お**とは めぐり**あ**ひて
 ころ**あ**てに

まず「ちぎりきな」を読んでみましょう。次に、一定性を確認するために、友札も読みます。

友札の「ちぎりおきし」は字余りつまり6字なので、「ちぎりきな」よりも1字ぶん長めになるはずですが、読手の中に「ちぎりおきし」を「ちぎりきな」と同じ長さ（5字の長さ）で読んでしまい読み急いでいるように聞こえることがあります。初句の場合、一定にするのは長さではなく速度です。速度を一定に保ってください。

百首のうち、字余りが含まれるのは30首以上あり、そのうち初句が字余りなのは「ちぎりおきし」を含めて8首あります。

興味深いことに、本居宣長が発見した法則どおり、百人一首の字余り句には、すべてその途中に母音の「あ」「い」「う」「お」が含まれています。字余りの母音の発音について少し研究が必要かもしれません。

さて、友札の読みが確認できたら伸ばしも入れて、連続で読んでみます。「ちぎりきな～」「ちぎりおきし～」。

このような部分練習・比較練習によって読みの自己点検を繰り返します。ここで誤解のないように言っておきますが、速度を一定に保たねばならないのは「決まり字まで」です。決まり字以外の部分については、極端でなければ若干速度に変化があってもかまいません。たとえば、私自身、「いまこ」の4句目と5句目がいずれも字余りなので、競技者のタイミングに合うよう、わずかにスピードを上げて読むなど調整していますし、他の読みにおいてもプラスアルファの味わいをもたらすため歌の意味を考えながら読みに工夫を加えています。

読みのポイントと効果的な練習法

①決まり字までの読み (発音・アクセント)	<input type="checkbox"/> 決まり字までの発音が明瞭である <input type="checkbox"/> 決まり字までの読み方が流麗である <input type="checkbox"/> 1～2音目のアクセントが低高でかつ一定である
②決まり字までの読み (速度・一定性)	<input type="checkbox"/> 読む速度が速すぎず遅すぎずかつ一定である <input type="checkbox"/> 友札相互の読み方が一定している

流麗=よどみがなく
なめらかで
うるわしい

- ちぎりきな → 「ち i」+ガ行 = i は有声音 (声帯が振動する)
- ちはやぶる → 「ち i」+ハ行 = i は無声音 (声帯が振動しない)

「母音の無声化」=「i」or「u」+カ・サ・タ・ハ行

※冊子版テキストP29～30参照

さらに「発音」に着目すると、「ちぎりきな」の「ち」の母音 i は有声音ですが、「ちはやぶる」の「ちは」のように、母音の i 音の直後にハ行が続くと母音 i は無声音になります。

無声音とは、声帯の振動を伴わない音で、のどの声帯のところに指を当てて発音してみたら振動しないのでわかります。「ちは」の「ち」は声帯が振動しないので、「ちぎりき」や「ちぎりお」の「ち」とは、微妙に異なります。とはいえ、この「母音の無声化」は、通常の会話のときにそうなるのであって、競技かるたにおける読みの場合、会話以上に明瞭な発音が求められますから、無声音になるはずが有声音になることもあります。みなさんも自分ののどに指を当てて確認してみてください。これは読手によってさまざま異なると思われます。

つまり、ここで重要なのは、「ちは」と「ちぎ」の違いをことさらに強調したり、逆にロボットの合成音のように「ち」の発音を無理に同じにそろえたりしなくていいということです。明瞭に発音しつつも競技者に違和感を感じさせない、自然な読みであればよいのです。審査項目でいうと「読み方が流麗である」かどうかです。

「流麗」とは「よどみがなくなめらかでうるわしい」という意味で、読みが自然で違和感がないことを指しています。

さらに加えて言えば、1音目と2音目のアクセントが流麗であるかも含めています。アクセントの説明をすると長くなるので、この講習ビデオでは割愛します。

①決まり字までの読み
(発音・アクセント)

- 決まり字までの発音が明瞭である
- 決まり字までの読み方が流麗である
- 1～2音目のアクセントが低高でかつ一定である

■ 1字決まり → むすめふさほせ (テキストP15)

【例】 さびしさに～
すみのえの～
せをはやみ～

中庸(ちゅうよう)

||

行き過ぎや不足がなく
常に調和が取れている理想の状態
「やりすぎず」「やらなさすぎず」

← 一音目から五音目まで
すべて同程度に重視

さらに、読み方が「流麗」であることに加えて、発音が「明瞭」であることも重要です。

お手付きをする原因について、競技者だけでなく、読手の発音方法についても考えてみます。たとえば、1字決まりの「さ」「す」「せ」を読む場合、「S音」を強く発音しすぎることによって、お手付きを誘発しているかもしれません。「S音」はいわゆる「摩擦音」で、狭いすきまに息を通過させて発音するので、息が強すぎると子音の「S音」が突出してしまいます。子音が突出してしまうと相対的に母音が弱く聞こえ、「さ」「す」「せ」の聞き分けに影響が生じると考えられます。

読みでは違和感がないこと、いわゆる「中庸」が求められます。「中庸」とは「行き過ぎや不足がなく常に調和が取れている理想の状態」を指しています。わかりやすく言うと、「やりすぎずやらなさすぎず」、ほどよい読みこそが理想の読みだということです。

読みの「中庸」を実現するために、初句の一音目から五音目までをすべて同程度に重視する方法をおすすめします。

たとえば「さびしさに」ですが、「【さ】びしさに～」となりがちなときは、読むコツとして、「さ」よりも「びしさに」の方に意識を置いて丁寧に読んでみましょう。前に説明した「初句のリピート」を用いて1字決まり7首読んでみます。「さびしさに～」「すみのえの～」「せをはやみ～」「むらさめの～」「めぐりあいて～」「ふくからに～」「ほととぎす～」。このように、繰り返し練習することで、読みが安定するはずです。

① 決まり字までの読み
(発音・アクセント)

- 決まり字までの発音が明瞭である
- 決まり字までの読み方が流麗である
- 1～2音目のアクセントが低高でかつ一定である

■ 1字決まり → むすめふさほせ (テキストP15)

ほととぎす～ → 「おととぎす」になりがち

一音目を「強く」読む → ×

一音目を「明瞭に」読む → ○

また、よくあることですが、人から一音目が聞こえにくいと言われて強く読んでみたところ、こんどは逆に強すぎると言われて、また弱くする、ということを繰り返すことがあります。

一音目は「強弱」ではなく「明瞭」かどうかが重要です。たとえば「ほととぎす」が「おととぎす」に聞こえることがあります。だからといって「【ほ】ととぎす」のように、「ほ」を強く読む必要はありません。明瞭に読むようにします。

ほととぎす～

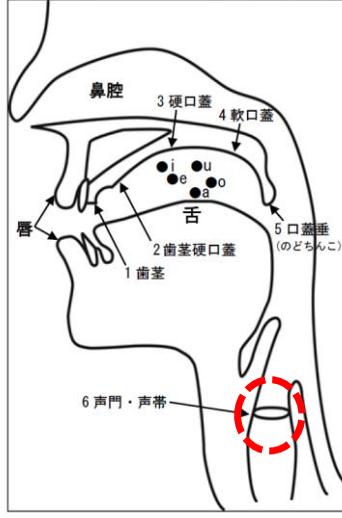
「ほ」→「声門」で息を「摩擦」させる

【調音点・調音法一覧】

※ゴシ
テキスト冊子P31

調音点	りょうしん 両唇		は しけい 1歯・歯茎	2 こう 硬
破裂音	バ行	タ・ダ		
破擦音		ツ・ザ	チ・	
鼻音	マ行	ナ・ヌ・ノ	ニ	
はじき音		ラ行		
摩擦音	フ	サ・ス・セ	シ	
接近音	ワ			

【口腔(こうこう)断面図】



(振動しない音)

んこうがい 軟口蓋	せいもん 6声門
・ケ・コ	
・ゲ・ゴ	
	ハ・ホ

明瞭に読むために、前に述べたとおり、初句をリピートする方法も有効ですが、ここでは「調音点・調音法一覧」を参考に練習してみます。テキストが手元にある人は31ページに同じものを掲載しています。

「ほ」は、調音点が「声門」で、調音法は「摩擦音」です。口腔断面図にあるように、「声門」はのどの声帯にある空間を指します。「ほ」は、この「声門」で息を「摩擦」させれば明瞭に発音できます。実際にやってみてください。ただし、明瞭でありさえすればよいわけではなく、流麗で自然な読みでなければなりません。

③余韻（3.0秒） 2.9～3.2秒	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ3.0秒である <input type="checkbox"/> 自然なフェードアウトで選手が集中しやすい
④間合い（1.0秒） 0.9～1.2秒	<input type="checkbox"/> 長さがほぼ一定に保たれている <input type="checkbox"/> 長さがほぼ1.0秒である <input type="checkbox"/> 吸気や音漏れなど雑音が生じていない

★余韻と間合いの長さ……各自のやり方で！

【参考】頭の中で1秒ずつカウントする方法

前にも述べたとおり、余韻は3.0秒で読むのがベストですが、2.9～3.2秒ならOKです。ただし、一首ごとに余韻の長さがぶれないようにします。

間合いの1.0秒については、0.9～1.2秒であればOKですが、余韻と同じく一定を保ってください。

余韻と間合いの長さを一定にする方法はさまざまで、人それぞれ適したやり方があると思うので、自分のやり方で努力してください。

参考までに、方法の一つを紹介します。秒針のある時計を使って1秒のタイミングを覚えます。覚えた1秒を指先で3回刻みながら余韻が3秒になるようにします。間合いが1秒なので、余韻と間合いを合わせると4回つまり4.0秒ということになります。

熟練してくると、指先でカウントせず、頭の中でカウントできるようになり、さらにはカウントそのものがなくなります。自分に合った方法を模索してみてください。

ちなみに、間合いですが、息を吸ってから読むとおよそ1秒になるので、それも併用しながら間合いのタイミングを取って見てはどうでしょうか。

③余韻（3.0秒）

- 長さがほぼ一定に保たれている
- 長さがほぼ3.0秒である
- 自然なフェードアウトで選手が集中しやすい

【集中しやすいフェードアウト】

= 選手が違和感を感じずタイミングを合わせやすい



- 急に途切れたりせずスーッと切れる
- 途中で母音の発音が変わらない

余韻について、選手が集中しやすいフェードアウトとはどのようなものでしょうか。

「選手が集中しやすい」とは「選手が違和感を感じず、タイミングを合わせやすい」ことです。具体的には、急に途切れたりせずスーッと切れる、途中で母音の発音が変わらない、などがあげられます。

【集中しやすいフェードアウト】

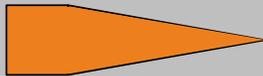
= 選手が違和感を感じずタイミングを合わせやすい



○急に途切れたりせずスーッと切れる

○途中で母音の発音が変わらない → **口・舌の状態をキープ**

にんじん型



だいこん型



さつまいも型



余韻をスーッと切るために、余韻に入ったら「早めに」フェードアウトを始めてください。これを「にんじん型」と呼び、理想のフェードアウトであると考えています。

それに対して、いつまでもボリュームをキープしている「だいこん型」は、しばらくボリュームが太いままなので、余韻を急にプツンと切ってしまったたり、余韻が長くなったり、の原因になるので避けてください。また、大きな会場でマイクを使用するとき、「だいこん型」は残響が発生しがちなので注意しましょう。

「さつまいも型」は余韻に入ってからボリュームが大きくなります。自然なフェードアウトに聞こえるよう工夫しましょう。ただし、競技者の好みもさまざまあって、余韻の途切れがわからないぐらいがよいと言う人と、途切れがはっきり聞こえた方がよいと言う人がいます。それらすべての要望に応えられるわけではないので、私としてはにんじん型を基本として違和感を与えない読みになるよう努めています。

また、途中で母音の発音が変わらないように、口と舌の状態をキープしたまま、腹筋で支えながらフェードアウトします。鏡を見て口の形が変化していないか確認するとともに、舌に指先を当てて変化していないか確認してみてください。

まとめ

- 競技者に違和感や不安感を与えない読みを！
- 「中庸」を心がける（やりすぎずやらなさすぎず）
- 初句の一音目から五音目までを同程度に重視する
- 明瞭な発音（初句のリピートと調音点・調音法の確認）
- 余韻・間合いは秒をカウントする
- 余韻のフェードアウトは「にんじん型」
- 自己の読みの客観視（読みの録音 → 自己分析）

ここまでの内容のまとめです。

最後に追加ですが、ぜひみなさんにやってほしいこととして、自己の読みを客観視すること、そのために時間に余裕があるときに、自分の読みを録音し自己分析することをお勧めします。さらに、競技者から、自分の読みに対するコメントをもらおうとよいでしょう。公式大会だと次の試合に影響があってはいけないので、練習会で読んだときにコメントをもらいます。競技者のコメントはとても参考になります。時には同じ読みに対して、人によってコメントが異なったりして、どっちが本当なのかわからないこともあります。一人がこう言ったからといってそれがすべてではありません。

たとえば、広い会場で、読手に近い人と遠い人では、読みが届く程度が異なります。また、競技者の暗記状態によって別の発音に聞きなしてしまう場合もあるでしょう。マイクを使用する場合、その性能やスピーカーの位置。最近であれば、飛沫防止対策によって音が聞こえにくくなるなど…。このように、読みは、必ずしも競技者に均一に届くわけではないということも少し念頭に置きつつよりよい読みをめざしてください。

■改訂した点 【テキストP1】

(1)「読唱の基本パターン」を「5・3・1・6方式」に名称変更した。従来は「4・3・1・5方式」

(2)伸ばし箇所について変更を加えた。

(3)読手として知っておくべき内容を追加した。

品詞分解・関連規程・調音点・調音法等を追加

最後に、新テキスト改訂のポイントについて説明します。テキスト1ページを見てください。

改訂した点は大きく3点あります。

なお、最初にことわっておきますと、この改訂についての移行期間が一年間になっていますが、新型コロナウイルスの影響により、講習会等でみなさんに周知するチャンスがないので、移行期間が延長されるかもしれません。

3つのうち、(1)について、従来は「4・3・1・5方式」でしたが、この「4」と「5」について、これまで講習会では4秒台後半、5秒台後半で読むように指導されたはずですが、専任読手も含め多くの人がほとんど5秒程度、6秒程度で読んでいるのが実態です。よって、誤解を避けるためと、実態に合わせるという意味において、今回の改訂で名称を「5・3・1・6方式」に変更しました。読手の多くは読みがすでに「5・3・1・6」になっていると思いますので、読みを変える必要はありません。安心してください。

(3)について、テキスト冊子版16ページ以降に大幅に追加しています。よく読んで理解を深めてください。

(2)の伸ばしの位置については大きく変更を加えました。

新テキスト改訂のポイント

■従来は上の句の最後二字前で伸ばしてもよかったもの【全12首】

<ul style="list-style-type: none"> ・ 難波湯……………ふしの～間も ・ 嘆きつつ……………明くる～間は ・ 忘らるる……………ちかい～てし ・ これやこの……………別れ～ては ・ 契りおきし……………いのち～にて ・ 人もおし……………あじき～なく ・ ひさかたの……………春の～日に ・ 月見れば……………悲し～けれ ・ 白露に……………秋の～野は ・ ももしきや……………しのぶ～にも ・ 村雨の……………まきの～葉に ・ めぐりあいて…わかぬ～間に 	⇒	<ul style="list-style-type: none"> ふしの間～も 明くる間～は ちかいて～し 別れて～は いのちに～て あじきな～く 春の日～に 悲しけ～れ 秋の野～は しのぶに～も まきの葉～に わかぬ間～に
---	---	--

二字をまとめて読む必要がない

ルールどおりの読みに統一

テキスト4ページを見てください。4ページの4にもあるように、上の句は最後の一字前で伸ばして読むというのが原則です。ただし、語の切れ目や読みやすさといった観点を考慮し、例外的に最後の二字前で伸ばすものを許容します。従来は、伸ばす箇所を一字前と二字前のどちらでもOKにしていたものが12首ありましたが、それらを一字前に統一しました。今後は、二字前で伸ばさないよう注意してください。最後の二字をまとめて読む必要がないので、原則どおりの読みに統一したということです。

たとえば、下から2つ目の「村雨の」について説明すると、「まきの葉っぱ」に、助詞の「に」が接続しているわけですから、「まきの」の後に伸ばしを入れて、「葉に」とまとめて読むよりも、「まきの葉」のあとに伸ばしを入れた方がよいということで統一しました。

新テキスト改訂のポイント

■従来は上の句の終わり二字前で伸ばしていたもの 【全25首】

- | | |
|------------------|-----------------|
| ・秋風に…………たえ間～より～ | ・天の原…………春日～なる～ |
| ・有明の…………別れ～より～ | ・難波江の……ひとよ～ゆえ～ |
| ・嘆けとて…………思わ～する～ | ・おおけなく…おおお～かな～ |
| ・わが庵は…………しかぞ～すむ～ | ・わびぬれば……難波～なる～ |
| ・高砂の…………咲きに～けり～ | ・このたびは……手向～山～ |
| ・恋すちょー…立ちに～けり～ | ・みかきもり……夜は～もえ～ |
| ・みかの原……いずみ～川～ | ・山里は…………まさり～ける～ |
| ・世の中は…………なぎさ～漕ぐ～ | ・世の中よ…………思い～入る～ |
| ・夜をこめて…はかる～とも～ | ・風をいたみ…おのれ～のみ～ |
| ・かくとだに…さしも～草～ | ・ちぎりきな…しぼり～つつ～ |
| ・ちはやぶる……竜田～川～ | ・君がため春……若菜～つむ～ |
| ・君がため惜…………命～さえ～ | ・つくばねの…みな～川～ |
| ・由良のとを…かじを～たえ～ | |

二字前で伸ばさなければならぬ3首

従来は上の句の終わりを二字でまとめて、その前で伸ばさねばならなかったものが25首ありました。

今回の改訂では、このうち3首だけは従来通り二字前で伸ばさねばならないこととし、それ以外の22首は一字前で伸ばしても二字前で伸ばしてもどちらでもよいことにしました。よって、100首のうち97首は一字前で伸ばせばよいこととなります。

二字前で伸ばさなければならぬ3首のうち、「わが庵は」の「すむ」は係り結びの結びであるため二字を切り離さない方がよいと考えました。「世の中は」は鼻濁音の「ぐ」を単独にすると違和感があり、「世の中よ」は「思いい～る」と発音しにくいという理由から「思い～入る～」とします。

■四句目の途中にすべて伸ばしを入れる

＜従来の読み＞

- ・ ちはやぶる…からくれないに
- ・ ちぎりきな…すえのまつやま

＜改訂後の読み＞

- ⇒ から～くれないに
- ⇒ すえの～まつやま

競技者のタイミングを優先

■二句目の途中の伸ばしを不要とする

＜従来の読み＞

- ・ おおことの…たえてし～なくば
- ・ よのなかは…つねに～もがもな

＜改訂後の読み＞

- ⇒ たえてしなくば
- ⇒ つねにもがもな

また、競技者がタイミングを取りやすくすることを優先し、四句目の途中にすべて伸ばしを入れることとしました。よって、四句目の途中に伸ばしのなかった「ちはやぶる」と「ちぎりきな」の読みが変わり、「から～くれないに」「すえの～まつやま」と読むことになります。さらに、二句目の途中に伸ばしを入れていた2首「おおことの」と「よのなかは」について、伸ばしを不要とします。ただし、競技には影響がないことから従来の読みも許容します。「たえてしなくば」の「し」は「たえて」を強める助詞であるにもかかわらず、以前「たえて～しなくば」と読む人がいました。また、「つねにもがもな」の「もがも」は願望の助詞ですが、「つねにも～がもな」と読む人がいました。このような文法を無視した読み方に対して、特にこの2首だけ二句目の途中に伸ばしを設定していたのですが、読みの普及によってもはやその役割を終えたと考え、今回の改訂では伸ばしを不要としました。

■四句目途中の伸ばしを一通りに統一したもの【全7首】

- ・ あらし吹く…竜田の～川の
- ・ 天の原……………三笠の～山に
- ・ ありま山……………いでそよ～人を
- ・ 嘆けとて……………かこち顔～なる
- ・ 心あてに……………おき～まどわせる
- ・ みちのくの…乱れそめ～にし
- ・ 白露に……………つらぬき～とめぬ

終了

■四句目途中の伸ばしを二通りに増やしたもの【全1首】

- ・ 人もおし……………世を～思—ゆえに 世を思—～ゆえに

■右横の読みの注を変更したもの

- ・ おおけなく……………お(お)—～かな → お(お)(お)～かな

その他にも、ここにあげたような変更がありますが、これらはテキストをよく確認し読み慣れてください。

さて、以上が、新テキスト改訂のポイントでしたが、これまでの読みに慣れていた人の中には、今回の変更に対応するのが難しいと思う人がいるかもしれせん。

変更に対応するための猶予期間がありますので、その間に新しい読みに慣れてください。

今回の説明がみなさんの読みの向上につながることを祈念して、講習を終了します。